

# ZINE をつくること

## —身体を介した理解とその記述—

長岡造形大学大学院造形研究科修士課程

美術・工芸領域

小山紀子

本論文は、ZINE をつくることの行為の内実を、実践とその省察を通じて考察するものである。ZINE をつくることは、筆者にとって「好きなものの話をするため」であり、ZINE とは、少数でつくられる自主制作出版物である。筆者は写真による「作品制作」と並行し「ZINE をつくること」を継続してきたが、両者は対照的である。作品制作が自己の外的な事象であるのに対し、ZINE 制作は生活と地続きにあり、制作過程で削ぎ落とされる情動や熱量をすくいとり、極めて個人的で心地よい行為である。

しかし、この「心地よさ」は主観的な感覚に留まっており、論理的な記述が困難であった。そこで本論文では、「私において「ZINE をつくること」とはどのような行為か」、また「ZINE をつくる「私」とはどのような存在なのか」という問いを主題にすえた。なお、本論文では作品制作と区別するため、意図的に作品「制作」と ZINE を「つくること」という言葉を使い分けて論じる。

ZINE は、その定義不可能性やアンダーグラウンドな出自ゆえに、既存のアカデミズムからは意図的に距離を置いてきた。また、あまりに自主的で私的な行為ゆえに研究対象としての線引きが困難な対象に対し、筆者は「制作者」かつ「研究者」という立場から、自らの実践を省察する手法を採った。具体的には、小松佳代子が述べるアーティストが自らの作品と制作を研究することについての議論を援用し、「つくる私」と「研究する私」の間にあえて「接面」を作り出す。この接面において生じている思考や感覚を「丁寧に記述する」ことで、主観的な領域にある「ZINE らしさ」や「つくる際の心地よさ」を研究として検討可能な形へと導き、了解可能性を高めることを試みた。

第1章では、1920年代後半のSFファンジンに端を発し、パンク・カルチャーの「DIY精神」を経て民主化・多様化したZINEの歴史を整理した。先行研究においてZINEは、非商業的・非専門的な「持たざる者のメディア」として、社会運動やコミュニティ形成における役割を重視して語られてきたことを述べた。また、同時にチャップ・ブックやリトル・マガジン、同人誌、アーティスト・ブックといった類似する出版物と比較検討することで、本論文が対象とするZINEの特徴を整理した。

第2章では、はじめに、第1章を受けて改めてどのようなものを ZINE と呼びうるのかについて検討した。なお、これは筆者が ZINE について改めて定義を検討するものではない。ステイブン・ダンカムやアリスン・ピープマイヤーの述べる ZINE の定義不可能性と、自身の経験から、ZINE は田中純の述べるような共通の基底面なしにただ並んでしまっている、パラタクシスの状態にあることを見出した。それを踏まえ、ある特定の ZINE を選び、それについて論じる際に、その選択を根拠付ける言葉として「ZINE らしさ」を設定した。しかし、この「ZINE らしさ」もまた、個人的で定義不可能なものである。そのため、本論文における「ZINE らしさ」は暫定的に筆者自身が捉えているものとして論じることとした。続けて、筆者が ZINE の定義不可能性の中で見出した「ZINE らしさ」の要点を、筆者の実践や他者の作品を考察することにより詳述した。それは、「即興性」と「物質性」、「本のようなものであること」である。筆者は、自身の「ZINE らしさ」の要点を「即興性」「物質性」「本（ページ）であること」の三点に求めた。「即興性」は、未完の状態をも許容し、ただ好奇心に形を与える態度を指し、「物質性」は、紙の手触りや温度を介した確かな経験を指す。そして「本のようなものであること」は、ページをめくる過程で複数の断片的なイメージが重なり、新たな像が結ばれる経験を意味している。

第3章では、本論文の問いである「ZINE をつくること」についてインディペンデント・マガジンの領域から考察した。ティム・ホルムズ概念を援用し、筆者の ZINE を「意味のないものに声を与えるマガジンの行為」とした。社会的主張を欠く「意味のない ZINE」であっても、自ら形を与えることはジョセフ・モンティーンの言う「能動的な制作態度」そのものであり、この「つくることの目的化」こそが筆者の「ZINE をつくること」であると述べた。また、ダンカムの議論から「つくる人」という土台の上に ZINE が成立しているのではなく、ZINE について語ることによって「つくった人がどのような人物であるか」が明らかになること、つまりそのように「ZINE をつくる私」は規定されると指摘した。

結章では、本論文を通じ、これまで曖昧であった「ZINE をつくること」の動機や内実が、記述することによってかたちを持ち始めたこと、しかし同時に、記述による分析的な態度は、まだ ZINE にならない、「語られないもの」を削ぎ落としてしまう問題点について述べた。

結論として、筆者にとって「ZINE をつくること」とは、特別な経験ではなく日々のなかで目に向ける「ただなんとなく」好きなことに、そのままかたちを与えていく行為であり、生活と地続きにあると示した。また、ZINE をつくることを通して、作品制作でのあらゆる意味付けから自身を解放し、ただ「好きなものの話を好きなようにできること」、これが最も重要な自身の「ZINE らしさ」としてとした。記述によってこぼれ落ちてしまう側面があることを引き受けながらも、記述することによって「記述できないもの」と、同時に「ZINE をつくる私」の輪郭をみとること、それこそが、筆者における「ZINE をつくること」である。